令和８年度全国学力・学習状況調査
小田原市の結果について

小田原市教育委員会

目　次

１　はじめに

２　調査の概要

（１）　調査の目的
（２）　調査の方式
（３）　調査の実施日および調査の対象
（４）　調査の内容
　　①　教科に関する調査
　　②　質問紙調査
（５）　本市の基本的な考え

３　教科に関する調査結果

（１）　令和８年度　各教科の平均正答率一覧
（２）　教科に関する調査結果【小学校】
　　①　直近５回の平均正答率の経年変化
　　②　国語について
　　③　算数について

（３）　教科に関する調査結果【中学校】
　　①　直近５回の平均正答率の経年変化
　　②　国語について
　　③　数学について
　　④　英語について

４　質問紙に関する調査結果

（１）　教育活動の取組状況に関わる項目について
（２）　教育環境に関わる項目について

１　はじめに

令和８年４月に実施された「令和８年度　全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要について報告する。本市の調査結果及び課題等を公表することにより、学校・家庭・地域がより一層の連携をし、本調査から見える児童生徒の学力や学習状況から学習指導の改善に努めていこうと考える。

また、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であることや、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないよう十分配慮して取り扱う必要がある。したがって、本内容を活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされるようお願いする。

２　調査の概要

（１）調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

（２）調査の方式

悉皆調査

参考

・令和４年度	国語、算数・数学、理科
・令和５年度	国語、算数・数学、英語（中学校のみ）
・令和６年度	国語、算数・数学
・令和７年度	国語、算数・数学、理科
・令和８年度	国語、算数・数学、英語（中学校のみ）

（３）調査の実施日および調査の対象

令和８年４月 23 日（木）

・小学校第６学年（市内 25 校、1,326 名）

・中学校第３学年（市内 11 校、国語：1,250 名、数学：1,254 名、英語３技能：1,251 名、英語４技能：1,210 名）

（４）調査の内容

①　教科に関する調査

・小学校・・・国語、算数

・中学校・・・国語、数学、英語

＊中学校英語は CBT による解答方式で実施

②　質問紙調査

・児童生徒に対する調査

・学校に対する調査

＊質問紙調査はオンラインによる回答方式で実施

（５）本市の基本的な考え

小田原市教育委員会では、「令和８年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」に基づき、本調査の結果について次のような考えを基本としている。

本調査で測定できるのは「学力の特定の一部分」であり、地域性や家庭環境等による影響も受けるものと認識しているが、調査問題は、学習指導要領の目標･内容等に基づいて作成されたものであり、その**結果は、児童生徒の学力の一側面を示す客観的な資料**である。

３　教科に関する調査結果

（１）　令和８年度　各教科の平均正答率一覧

（国語、算数・数学の単位は％、中学校英語は IRT スコア）

＊IRT　難易度の異なる問題を解いても正誤パターンから学力を推定できる項目反応理論スコア（500 点が平均の目安）

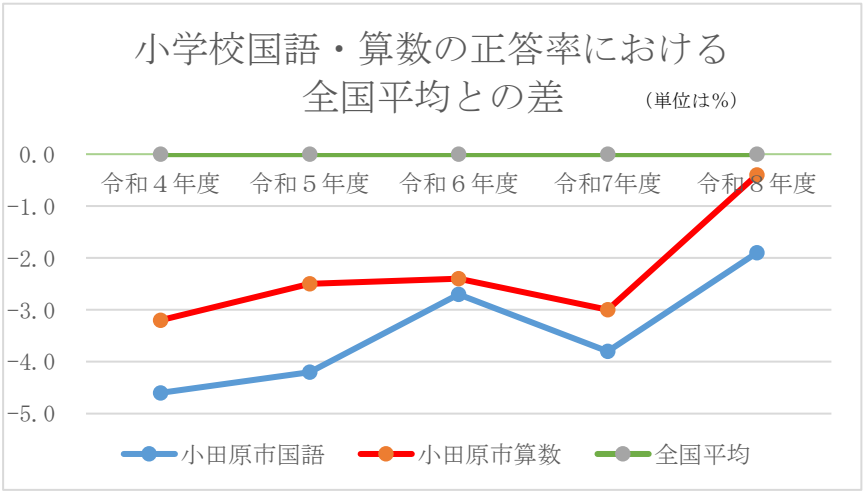
	教　科	小田原市	神奈川県	全　国
小学校	国語	59	61	60.9
	算数	56	58	56.4
中学校	国語	62	65	63.9
	数学	56	59	57.0
	英語	501	524	499

※市や県の正答率は整数表示

小田原市の平均正答率は、全教科で「全国平均正答率±10％」の範囲内に含まれており、**全国との大きな差は見られない**。また中学校の英語についても、２ポイントの差は**全国と同等の学力水準**と考えることができる。

（２）　教科に関する調査結果【小学校】

①　直近５回の平均正答率の経年変化



小学校調査では、**平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない。**

② 国語について

言葉についての知識及び技能を問う設問では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」では直近５年間のうち最も小さく、また「情報の扱い方に関する事項」では昨年度より 2.3 ポイント、全国平均との差が縮まった。

＜小学校国語「知識及び技能に関する事項」における全国平均正答率との差＞（単位は%）

知識・技能	令和４年度	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度
言葉の特徴や使い方に関する事項	−6.8	−3.8	−4.9	−7.3	**−2.6**
情報の扱い方に関する事項	―	−0.7	+1.7	−3.1	−0.8
我が国の言語文化に関する事項	−8.7	―	−2.3	−3.1	―

その中でも最も全国平均と差が開いた設問を取り上げる。

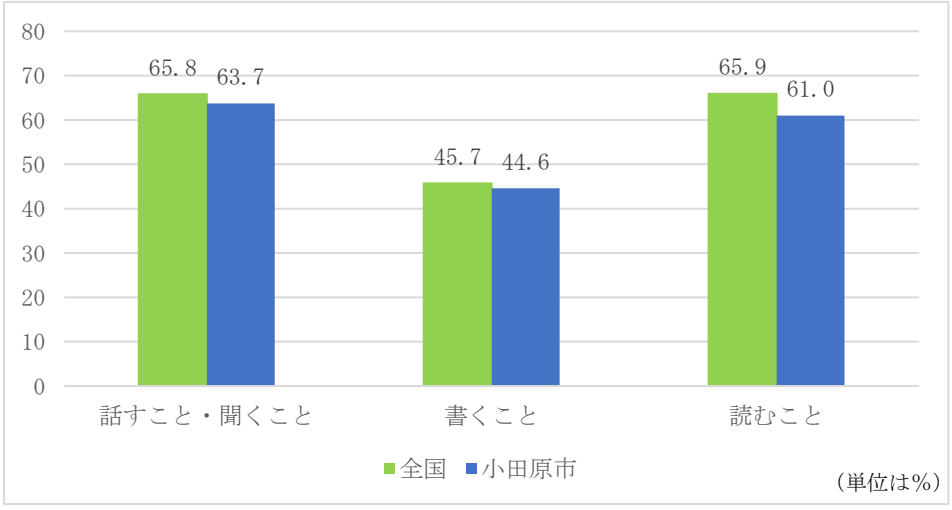
	問題の概要	出題の趣旨	小田原市正答率	全国との差
１　二（３）	〈音声〉の下線部の工夫の効果として適切なものを選択する	比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができるかどうか	**59.4**	**−5.8**

「**風船をふくらませるように**　息をふきこむと」という比喩表現が、何を目的にしてどう機能しているかを適切に理解することが難しかったと考えられる。また、誤答した解答類型を見ると、当該問題の前の解答に引きずられていることも見受けられる。なお、無回答率は 1.4%で、全国平均 0.8%を上回る。

相手に伝わりやすくするための比喩表現の活用を、実際の文章作成を通じて取り組むことや、物語や説明的文章の中で登場する比喩表現について、その意味や機能を読取るといった取組をするとよい。

学習指導要領の内容の「思考力、判断力、表現力等」の項目のうち、全国平均正答率との差が大きいのは「読むこと」の区分である。また令和７年度は令和６年度よりも差を 0.7 ポイント縮めたが、今年度は令和７年度よりも 1.2 ポイントその差を広げた。

＜小学校国語「思考力、判断力、表現力等に関する事項」における平均正答率＞



＜小学校国語「読むこと」の問題と正答率＞（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
３三 （２）	【文章】を読んで考えたことを、自分の経験と結び付けてまとめて書く	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる	**69.0**	**-7.4**

「読むこと」の問題では、「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる」の問題の正答率が、全国平均正答率と比べて差が大きい。また、無回答率も全国平均が 15.6%であったのに対し、本市は 21.6%であり、６ポイントの差があった。解答類型を見てみると、［１］【文章】を読んで考えたことを書いている、と［２］【文章】から言葉や文を取り上げて書いている、２つの条件は満たしているが、［３］自分の経験と結び付けて書いているの条件を満たしていない解答がやや多い。

文章を読み、自分の考えをまとめるためには、説明や解説といった文章の他、意見、提案、報道など身近な話題の文章を比較しながら読むことが重要である。それにより、共通点や相違点を明確にしながら、自分の経験と関係付けて考えをまとめるといった取組をするとよい。

【まとめ】

児童質問紙では、「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか」の質問に対し、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」は 76.7%で全国平均より 2.6 ポイント下回り、反対に「書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりしたものがあった」は 18.3%と全国平均より 3.6 ポイント上回った。上記した３三（２）において無回答率が 21.6%であったことも、これらと関連があると考えられる。

文章を読んで自分の考えや感想をまとめるためには、まず、文章の構造や内容をよく把握し、解釈することが重要である。また、その際には、**単一の情報のみに基づくのではなく、複数の情報を比較や分類したり、関係づけたりして検討すること**を指導するとよい。それによって明らかになる、共通点や相違点をもとに自分の考えをまとめる取組をする。加えて、**互いの意見や感想の違いも明らかにし、その良さを認め合うこと**が重要である。



③　算数について

全ての領域において、昨年度よりも全国平均正答率との差が縮まった。なお、「図形」「測定」「変化と関係」の領域では全国平均正答率を多少上回った。

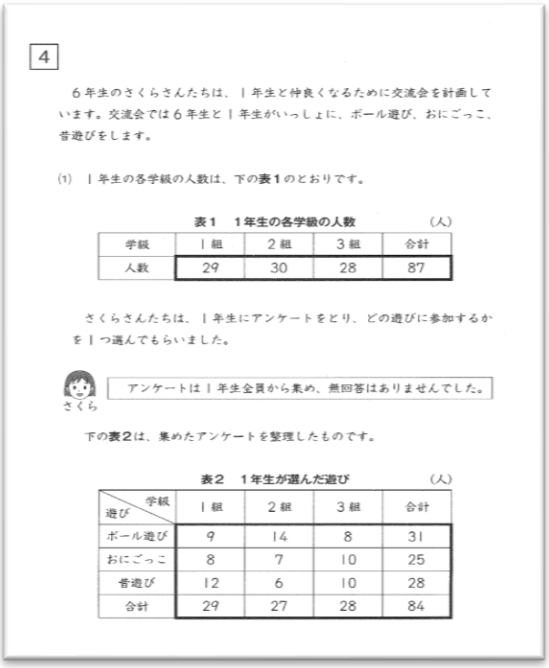
＜小学校算数領域別の全国平均正答率との差＞（単位は%）

領　域	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度
数と計算	-3.9	-3.5	-3.0	-1.4
図形	-2.5	-2.8	-3.8	+0.4
測定	―	―	-0.8	+0.1
変化と関係	-2.2	-1.6	-1.3	+0.6
データの活用	-3.1	-0.5	-3.6	**-2.0**

「データと活用」の領域の問題において、特に全国平均正答率との差が大きかったのは次の問題である。

＜小学校算数「データの活用」の問題と正答率＞（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
4（1）	全員分のアンケートが整理されていない学級を見付け、その根拠となる人数を表１と表２の中から書く	示された二つの表から、集計に誤りのある項目を見付け、その根拠を表の中の数と言葉を用いて記述できるかをみる	**51.4**	**−4.8**



4

6年生のさくらさんたちは、1年生と仲良くなるために交流会を計画しています。交流会では6年生と1年生がいっしょに、ボール遊び、おにごっこ、音遊びをします。

(1) 1年生の各学級の人数は、下の表1のとおりです。

表1　1年生の各学級の人数　（人）

学級	1組	2組	3組	合計
人数	29	30	28	87

さくらさんたちは、1年生にアンケートをとり、どの遊びに参加するかを1つ選んでもらいました。

さくら：アンケートは1年生全員から集め、無回答はありませんでした。

下の表2は、集めたアンケートを整理したものです。

表2　1年生が選んだ遊び　（人）

遊び＼学級	1組	2組	3組	合計
ボール遊び	9	14	8	31
おにごっこ	8	7	10	25
音遊び	12	6	10	28
合計	29	27	28	84

当該問題は左記のようになっている。また、この続きには「1年生全員からアンケートを集めたはずなのに、表２には、全員分のアンケートが整理されていないのではないでしょうか」というコメントも入る。このことから、「全員分のアンケートが整理されていない学級」は何組で、その根拠を表の中の数と言葉を用いて解答するというものである。

＜正答の条件＞
学級を２（組）と書き、次の(a)、(b)の全てを書いている。
(a) 表１の２組の人数が 30 人であることを表す数と言葉
(b) 表２の２組の合計の人数が 27 人であることを表す数と言葉

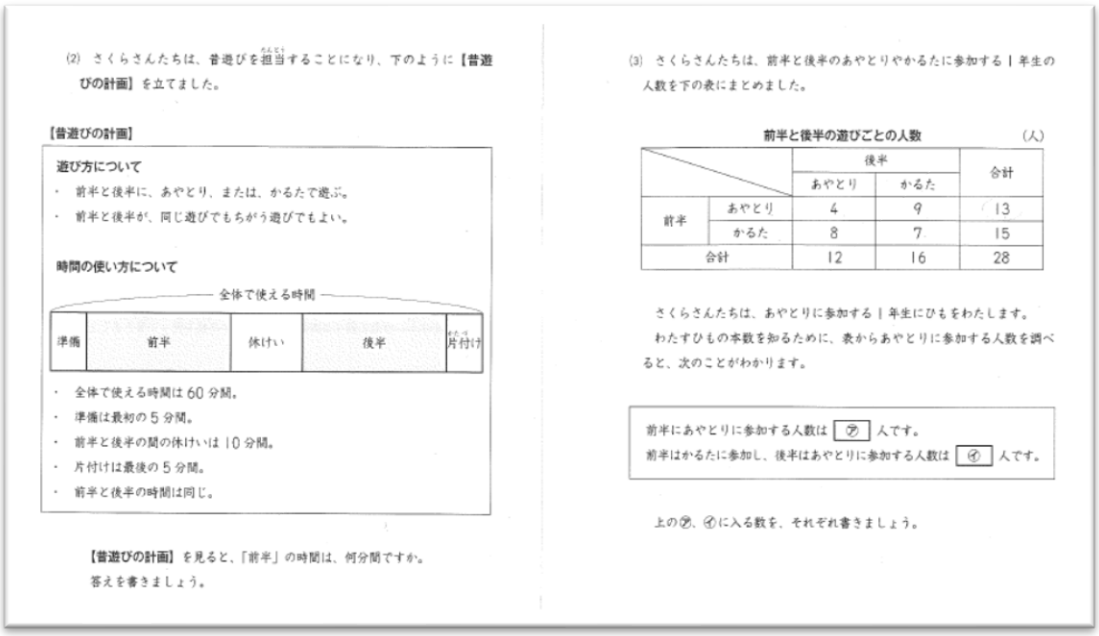
解答類型と解答した児童数の割合
［１］学級は２組と解答し、根拠は(a)、(b)の全てを書いている児童…51.4%
［２］学級は２組と解答し、根拠は(a)又は(b)と書いている児童…４%
［３］学級は２組と解答し、根拠は学年の合計の人数について書いている児童…0.7%
［４］学級は２組と解答し、根拠は表１と表２の人数の差３について書いている児童…2.0%
［５］学級は２組と解答し、根拠は類型［１］から類型［４］以外の解答、又は無解答…28.4%
［６］学級は２組以外の解答、または無解答で、根拠は(a)、(b)の全てを書いている、または、(a)又は(b)を書いている児童…0.7%
[99]上記以外の解答…8.4%
［０］無解答…4.5%

解答類型［５］に該当した児童が 28.4%いることから、収集されたデータの間違いには気付いたものの、その根拠を正しく示すことが困難であったことが読み取れる。一度得られたデータの妥当性を検討する際、データの収集過程に問題はなかったか、分析の仕方やそこから導き出した結論は妥当なものであるかといった検討をする取組の中で、その根拠となる情報を明らかにしながら説明し合う活動をするとよい。

なお、全国的にも 17.9%と正答率が低かった問題は「データの活用」領域の次の問題である。小田原市でも 17.3%の正答率であった。

＜小学校算数「データと活用」の問題と正答率＞（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
4（3）	二次元表から、前半にあやとりに参加する人数と、前半はかるたに参加し、後半はあやとりに参加する人数を書く	二次元の表から、条件に見合う数を読み取ることができるかどうかをみる	17.3	-0.6



(2) さくらさんたちは、普遊びを担当することになり、下のように【普遊びの計画】を立てました。

【普遊びの計画】

遊び方について
- 前半と後半に、あやとり、または、かるたで遊ぶ。
- 前半と後半が、同じ遊びでもちがう遊びでもよい。

時間の使い方について

全体で使える時間

準備	前半	休けい	後半	片付け

- 全体で使える時間は 60 分間。
- 準備は最初の 5 分間。
- 前半と後半の間の休けいは 10 分間。
- 片付けは最後の 5 分間。
- 前半と後半の時間は同じ。

【普遊びの計画】を見ると、「前半」の時間は、何分間ですか。
答えを書きましょう。

(3) さくらさんたちは、前半と後半のあやとりやかるたに参加する 1 年生の人数を下の表にまとめました。

前半と後半の遊びごとの人数 (人)

		後半		合計
		あやとり	かるた	
前半	あやとり	4	9	13
	かるた	8	7	15
合計		12	16	28

さくらさんたちは、あやとりに参加する 1 年生にひもをわたします。
わたすひもの本数を知るために、表からあやとりに参加する人数を調べると、次のことがわかります。

前半にあやとりに参加する人数は ㋐ 人です。
前半はかるたに参加し、後半はあやとりに参加する人数は ㋑ 人です。

上の㋐、㋑に入る数を、それぞれ書きましょう。

解答類型と解答した児童数の割合

［1］アは 13 と解答し、イは８と解答している児童…17.3%
［2］アは 13 と解答し、イは９と解答している児童…1.4%
［3］アは 13 と解答し、イは類型［1］，類型［2］以外の解答、無解答の児童…25.3%
［4］アは４又は９と解答し、イは８と解答している児童…18.6
［5］アは４又は９と解答し、イは９と解答している児童…6.1%
［6］アは４又は９と解答し、イは類型［4］、類型［5］以外の解答、無解答の児童…14.6%
［7］アは 12 と解答し、イは８と解答している児童…0.1%
［8］アは 12 と解答し、イは９と解答している児童…0.0%
［9］アは 12 と解答し、イは類型［7］、類型［8］以外の解答、無解答の児童…4.1%
［10］アは類型［1］から類型［9］以外の解答、無解答、イは８と解答している児童 0.7%
［11］アは類型［1］から類型［9］以外の解答、無解答、イは９と解答している児童 0.2%
［99］上記以外の解答の児童…6.9%
［0］無回答の児童…4.7%

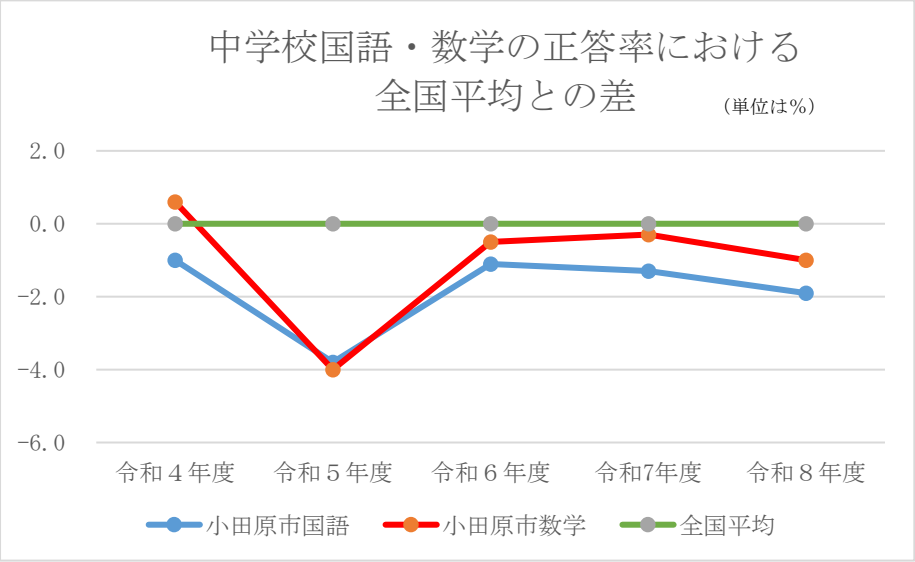
最も多かった解答類型［３］をみると、一つの情報を読み取ることはできても、交差する二つの情報を読み取ることが困難であったことが考えられる。与えられた表を読むだけでなく、まずは、２つの属性がある情報について日常の事象から「バラバラなデータをどう整理したらわかりやすいか」という問いを見出し、情報を自分で分類し、表に整理するといった数学的活動に取り組むとよい。２つの属性がある情報に対する感覚的な理解や、表の構造に対する理解が促される。またその操作の過程や結果について友達と伝え合うことで、自分がどう思考したかを客観的に捉える力がつくことが考えられ、示された表の意味への理解が確かになる。

【まとめ】
「データの活用」の学習では、身近な日常の事象から目的に応じて必要なデータを実際に収集し、データを比較したり関係づけたりして**具体的に操作をしながら表にまとめるといった数学的活動**を行うことで、**記号や数値の抽象的な表への理解を確かにする**ことが重要である。また、**その操作の過程や結果について振り返りをしたり伝え合ったりする**活動を通して、より高次な認知的理解を促す指導をするとよい。



（３）教科に関する調査結果【中学校】

① 直近５回の平均正答率の経年変化



令和８年度中学校英語 IRT スコア	
小田原市	全国
501	499

中学校調査では、各教科で**全国平均との差が多少広がったが、平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない。また、英語 IRT スコアも全国平均と同程度である。**

② 国語について

昨年度は思考力、判断力、表現力等の「B 書くこと」について全国平均との差は-2.8 ポイントと最も差が大きく課題と挙げていたが、今年度は-1.2 ポイントに縮まっている。一方、知識及び技能の「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」については昨年度の-2.2 ポイントと比較して - ３ポイントと多少ではあるが差が広がった。

＜中学校国語　区分別の全国平均正答率との差＞（単位は%）

分類		区分	小田原市 正答率	全国 との差
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	**60.0**	**-3**
		(2) 情報の扱い方に関する事項	70.0	-0.4
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	―	―
	思考力、判断力、表現力等	A　話すこと・聞くこと	63.5	-0.4
		B　書くこと	66.2	-1.2
		C　読むこと	58.6	-1.1

＜中学校国語「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」の問題と正答率＞（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
３一	文書作成ソフトに表示された意味と用例を参考にして、漢字を書き、漢字の組み合わせとして適切なものを選択する（とる）	文脈に即して正しく漢字を書き、語句を文章の中で使うことができるかどうかをみる	**30.2**	**-9.6**

今回の結果から、文脈に即して正しく漢字を書き、語句を文章の中で使うことに課題があることが考えられる。その際、音訓を意識し、同音異義語などの意味の違いに注意して、漢字を正しく使うことができるよう指導することが大切である。今後、一人一台の端末を活用した文章作成の機会が増えていく中であるが、手書きで漢字を書くことを通して、漢字の構成要素である「へん」や「つくり」などに注目し、字形を正しく捉えたり読みを類推したり、大まかな意味を捉えたりすることが効果的である。また、和語（とる）の持つ抽象的なイメージを、意味が明確な漢語（「撮影」「搾取」「採取」などの熟語）と結び付ける取組もよい。言葉を体系的な構造として理解し、語彙を豊かにすることも重要である。なお、無解答率は 0.2%であり全国平均 0.3%と同等であった。

＜中学校国語「C　読むこと」の問題と正答率＞（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
４四	二つの例文を比べながら、擬態語「きっぱり」が表している具体的な様子と擬態語の効果を書く	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにすることができるかどうかをみる	**38.6**	**-0.3**

全国平均正答率との差は大きくなかったが、例年課題となっている「C　読むこと」に関する問題で、正答率が特に低かった解答状況について検討する。

この問題は無回答率も 19.0%と高く、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにすることに課題があると考えられる。説明的な文章を読む際には、語句の辞書的・文脈的な意味を正しく捉えた上で、「要点」と「補足」を整理し、その主旨を解釈しながら、自分の考えを確かにしていくことが求められる。自分の考えを形成する際は、具体的な場面を思い浮かべ、読解のプロセスで理解したことと、自分の捉え方を結び付けながら

「なぜそう思ったか」を振り返ることで、考えがより確かになることが考えられる。さらに、自分の考えを他者と共有し合う学習過程を踏むことで、それまでの自分の捉えを改めて客観的に見直し、考えをより深められる。

【まとめ】
文脈に即して正しく漢字を書き、語句を文章の中で使うためには、**漢字の構造に対する理解**が確かになるように、**改めて手書きで漢字を書くことを通して字形を正しく捉えたり読みを類推したり、大まかな意味を捉えたりするとよい**。また、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにすることについては、それまでに**自分が文章の構造や内容をどのように捉え、精査・解釈したのか振り返り、そこで理解したことと結び付けながら**自身の捉え方を練り上げていけるように指導することが重要である。

③　数学について

昨年度、「データの活用」の領域は全領域の中で最も、全国との差が大きくなっており、課題であったが今年度はその差を縮めることができた。一方、「関数」の領域は全国との差に開きが見られる。

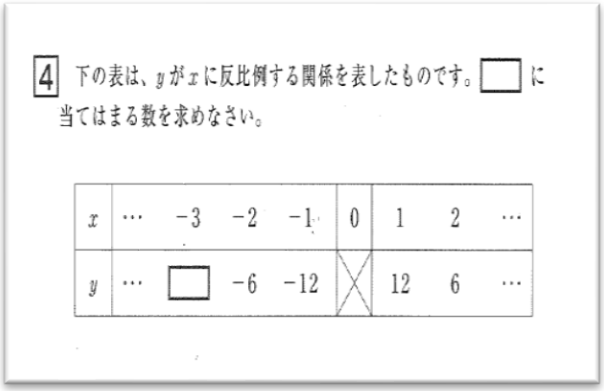
＜中学校　数学領域別の全国平均正答率との差＞（単位は%）

領　域	小田原市	全国との差
数と式	65.9	−1.9
図形	50.4	−1.7
関数	52.6	**−2.2**
データの活用	52.0	−1.5

「関数」の問題で、全国平均正答率との差が一番大きいのは次の問題である。

＜中学校数学「関数」の問題と正答率＞（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市正答率	全国との差
4	反比例の表において、ｘの値が−３のときのｙの値を求める	反比例の関係を表す表の特長を捉えて、ｘの値に対応するｙの値を求めることができるかどうかをみる	**51.4**	**−3.9**


4　下の表は、yがxに反比例する関係を表したものです。□に当てはまる数を求めなさい。

x	…	−3	−2	−1	0	1	2	…
y	…	□	−6	−12	×	12	6	…

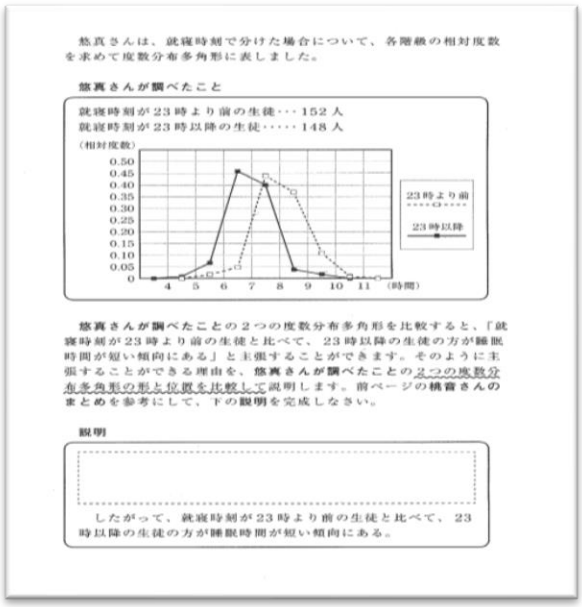
解答類型
［1］　−４と解答している生徒…51.4%
［2］　４と解答している生徒…0.6%
［3］　０と解答している生徒…14.4%
［4］　−３と解答している生徒…19.8%
［99］　上記以外の解答…0.0%
［5］　無回答…1.0%

解答類型［３］の生徒は、ｙの値が－12 から－６に変化していることについて、差に着目して解答したと考えられる。また解答類型［４］の生徒は、ｙの値に着目し、－６が－12 の １／２倍になっていることから－３と解答したと考えられる。このことから、反比例の関係を表す表の特徴を捉えて、ｘの値に対応するｙの値を求めることに課題があると考えられる。具体的な事象について、観察や操作、実験などの活動を通して二つの数量の関係を捉え、比例や反比例の関係を見いだすことができるように指導することが大切である。

問題別にみると、正答率が低いのが「データの活用」の問題である。

＜中学校数学「D データの活用」の問題と正答率＞（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
9 （３）	「就寝時間が 23 時より前の生徒と比べて、23 時以降の生徒の方が睡眠時間が短い傾向にある」と主張できる理由を、悠真さんが調べたことの二つの度数分布多角形の形と位置を比較して説明する	データの傾向を的確に捉え、判断の理由を度数分布多角形の特徴を基に説明することができるかどうかをみる	**28.5**	**-3.4**


悠真さんは、就寝時刻で分けた場合について、各階級の相対度数を求めて度数分布多角形に表しました。

悠真さんが調べたこと

就寝時刻が23時より前の生徒…152人
就寝時刻が23時以降の生徒……148人

（相対度数）
0.50
0.45
0.40
0.35
0.30
0.25
0.20
0.15
0.10
0.05
0
4 5 6 7 8 9 10 11（時間）

23時より前
23時以降

悠真さんが調べたことの２つの度数分布多角形を比較すると、「就寝時刻が23時より前の生徒と比べて、23時以降の生徒の方が睡眠時間が短い傾向にある」と主張することができます。そのように主張することができる理由を、悠真さんが調べたことの２つの度数分布多角形の形と位置を比較して説明します。前ページの桃音さんのまとめを参考にして、下の説明を完成しなさい。

説明

したがって、就寝時刻が23時より前の生徒と比べて、23時以降の生徒の方が睡眠時間が短い傾向にある。

正答の条件

次の(a)(b)について記述しているもの。

(a) 就寝時刻が 23 時より前の生徒の度数分布多角形と就寝時刻が 23 時以降の生徒の度数分布多角形が同じような形であること。

(b) 就寝時刻が 23 時より前の生徒の度数分布多角形よりも就寝時時刻が 23 時以降の生徒の度数分布多角形の方が左側にあること。

解答類型と解答した生徒数の割合

［１］(a)(b)について記述している生徒…28.5%

［２］(a)について記述し、二つの度数分布多角形の位置が異なることのみを記述している生徒…9.3%

［３］(a)のみを記述している生徒…10.4%

［４］(b)のみを記述している生徒…3.7%

［５］(a)(b)について、度数分布多角形を根拠にしているが、読み取りを誤って記述している生徒…0%

［99］上記以外の解答の児童…15.9%

［０］無回答の児童…31.1%

生徒がデータの傾向を正確に読み取り、根拠を持って判断できるようになるには、自ら課題を解決する体験的な学習が不可欠である。

解答類型［２］とした生徒は、二つの度数分布多角形が同じような形であることや、位置関係において二つの度数分布多角形がずれているということには着目できているが、「○○の方が□□側にずれている」のように主張の根拠を明確にして表現できなかったなどが考えられる。また解答類型［99］の場合、度数分布多角形の形と位置関係のどちらかに着目したものの、明確な根拠を示して説明ができなかったことなどが考えられる。

この課題を克服するためには、単にグラフを読むだけでなく、目的に応じて自らデータを収集・分析し、批判的に考察する一連のプロセスを体験することが重要である。身の回りの問題解決を通じて「なぜその結論になるのか」をデータに基づいて説明する学習活動に取組むことで、根拠ある判断を導く力と表現力を高めたい。

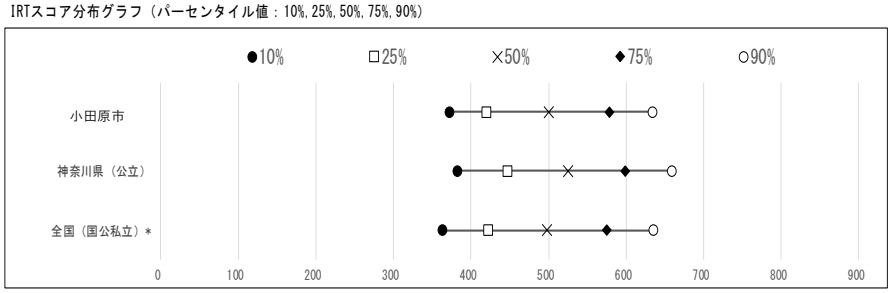
【まとめ】

関数の領域において、反比例や比例の関係を表す表の特長を捉えて、必要な値を求めることができるためには、**具体的な事象について、実際の観察や操作、実験などの活動を通して二つの数量の関係を捉え、比例や反比例の関係を見いだすこと**ができるように指導することが大切である。また、データの活用の領域においては、**身の回りの問題に対して、データを使って根拠のある解決策や判断を導き出すといった文脈のあるプロセスを体験しながら理解を確かにすること**が重要である。どちらもこうした数学的活動を通して、生徒自身が問いを持ち、データを使って説得力ある結論を導き出すような学習の工夫が必要である。

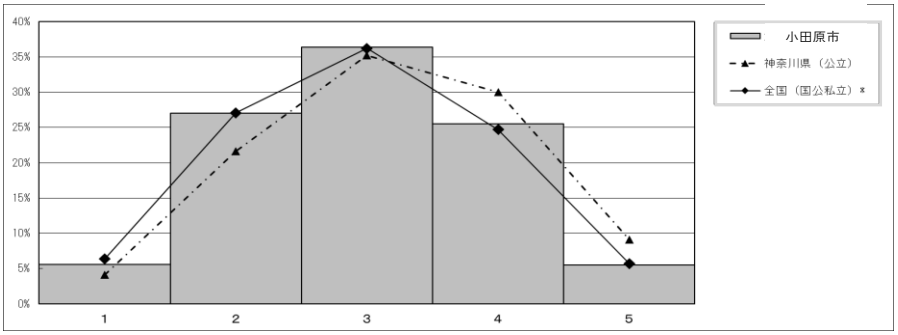
④　英語について

令和８年度の実施における結果は IRT に基づいており、500 を基準とする IRT スコアで表示されている。またその結果は次のようにグラフに表される。

（ｉ）IRT スコア分布グラフ



（ⅱ）IRT バンド分布グラフ



令和８年度全国学力学習状況調査　調査結果概況より

また、IRT スコア及び IRT バンドの見方は次のようである。

♦用語説明

IRT	項目反応理論。児童生徒の正答・誤答が、問題の特性によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論。異なる問題から構成される試験・調査の結果を同じものさし（尺度）で比較できる。
IRTスコア	IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すもの。各教科にCBT・IRTを導入する年の全国平均500を基準値とし、経年比較が可能な形で算出。 基準値の全国平均は、算出された各生徒のスコアを足し合わせて平均をとっているため、500 に一致するとは限らない。 理想的な正規分布(データが平均の付近に集積するような分布)となった場合、標準偏差は100となるが、実際の各生徒のスコア状況により変動する。
IRTバンド（※3）	IRTスコアを1～5の5段階に区切ったもので、平均バンドは3、最も高いバンドは5となる。各教科にCBT・IRTを導入する年の全国平均3を基準値とし、経年比較が可能な形で算出。 IRTバンドは、生徒ごとに算出したIRTスコアを決められた幅に区切って設定。IRTバンドが理想的な正規分布となった場合、3が約40%、2・4が約23%、1・5が約7%となるが、実際の各生徒のスコア状況により変動する。

（※3）今年度の中学校英語IRTバンドにおけるIRTスコアの区分は次のとおりである。

中学校英語 IRTバンド	1	2	3	4	5
4技能スコア換算	~341	342~448	449~556	557~663	664~
3技能スコア換算	~329	330~443	444~558	559~673	674~

国立教育政策研究所ホームページ「令和８年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）」より

IRT スコア分布の結果を見ると、下位 10%（●）～上位 90%（○）の幅が、全国とほぼ同等で、層のばらつき方にも極端な偏りはないことが分かる。また、IRT バンド分布の結果からは、ピークの位置がバンド３に来ており、全国標準と非常に近い構造となっていることも分かる。

また、本調査では、IRT スコアを元に、全国、及び各市町村の平均値を算出することも行っている。それに基づくと、全国平均正答率に対し「聞くこと」「読むこと」「書くこと」では全体を通して全国平均よりもやや高い結果が見られている一方で、「話すこと」は全体を通してやや低い結果が出ている。中でも正答率・無回答率が高かった問題について取り上げる。無回答率は 23.4%である。

＜中学校英語「話すこと［発表］」の問題と正答率＞（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市正答率	全国との差
19	学校生活をよりよくする方法に関して聞いたことについて、考えとその理由を話す	社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を話すことができるかどうかみる	**23.4**	**−2.4**



解答類型と解答した生徒数の割合

［0］(a)(b)を満たして解答している生徒…16.6%

［2］文法事項などに誤りがあるが、(a)(b)を満たして解答している生徒
※「文法事項など」とは、音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを指す…6.8%

［3］(a)を満たし、(b)を満たさないで解答している生徒…23.0%

［4］(a)を満たし、(b)に関する発話がない生徒…4.3%

［5］(a)を満たしてないが、(b)を満たして解答している生徒…3.8%

［6］(a)に関する発話はないが、(b)を満たている生徒…0.4%

［7］(a)、(b)を満たさないで解答している生徒…19.4%

［99］上記以外の解答の生徒…2.3%

［0］無回答の生徒…23.4%

正答の条件
次の条件を満たして解答している。
(a)　話し手の意見に対する自分の考えを話している。
(b)　(a)の理由を話している。

※［1］及び［2］が正答

英語19における無回答率（23.4%）の要因として次の3点が考えられる。〈1〉相手の話す内容や求める回答を理解することができなかった。〈2〉相手の話す内容は理解できたが、自分の考えが思い浮かばなかった。〈3〉自分の考えは思い浮かんだが、適切な英語表現が思い浮かばなかったなどの可能性が考えられる。

【まとめ】
英語の話すことにおいて、社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を話すためには、相手の話の文章構成・キーワードに着目して聞き、**話し手の意図の手掛かりとなる語句や表現をメモ**するように指導するとよい。その**メモに賛否などの自分の考え**やその理由を書き足すことで、自分の考えを整理することができる。**メモを元に、自分の考えを伝え合う活動**を通して、適切な表現になっているかを学級で共有しながら繰り返し検討することで、内容面と言語面の両方を理解していくことが重要である。

４　質問紙に関する調査結果

質問紙調査については、（１）教育活動の取組状況に関わる項目について（２）教育環境に関わる項目についての２点で整理をしていく。**これらの項目についてできるだけ肯定的な回答をする児童生徒を増やしていく**ことが、学力の向上にもつながると考える。



（１）教育活動の取組状況に関わる項目について

【項目１】「国語の授業内容がよく分かる」

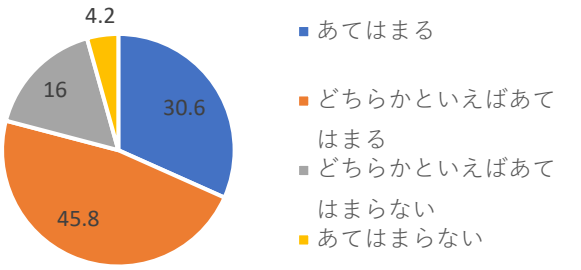
【項目２】「算数・数学の授業内容がよく分かる」

※小学校、中学校ともに「国語（算数・数学）の授業内容はよく分かりますか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合

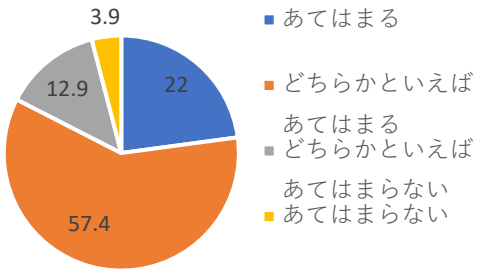
		小田原市	全国
小学校	国語	**79.7%**	81.5%
	算数	**74.2%**	77.5%
中学校	国語	**76.7%**	76.8%
	数学	**77.1%**	74.2%

【項目３】「前の学年までに受けた授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間などになっていた」

5年生までに受けた授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間になっていましたか　【小学校】　＊単位は%



１・２年生の時に受けた授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間になっていましたか　【中学校】　＊単位は%



国語、算数・数学ともに、授業の内容がよく分かると回答した割合は、昨年度と比較して全国的に横ばいであり、小田原市は令和３年度に設定した目標値（国語 90%、算数・数学 89%）に届いていない。児童生徒が、自分の理解を確かめながら学習を進めていくことは、学習内容の定着につながっていく。**理解の度合やスピードは一人ひとり異なるため、教え方、教材、学習時間の設定について、それぞれが最適であると感じられるように個に応じた指導を引き続き工夫していく必要がある。**

【項目４】「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」

※小学校、中学校ともに「前学年までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合

	小田原市	全国
小学校	**74.2%**	77.6%
中学校	**75.9%**	78.8%

課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組もうとする児童生徒の割合は全国平均をやや下回る結果であった。肯定的な回答をした児童生徒ほど各教科の平均正答率が高い傾向であることが明らかになっており、主体的に課題に取り組むことは大変重要である。また、ウェルビーイングに関する回答との相関もあることが分かっている。昨年度に引き続き、中学校の回答率が小学校を上回り、本市で進めている小田原版 STEAM 教育のような、自ら課題を設定し解決に向けて取り組む活動の効果の表れと考えられる。今後も、与えられた課題に取り組むだけではなく、**児童生徒一人ひとりが興味関心を高めて問いをもち、その解決に向けて知識や技能を活用し、学びを深めていくことが大切である。**

【項目５】「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができている」

※「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができていますか」という質問事項に対し、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合

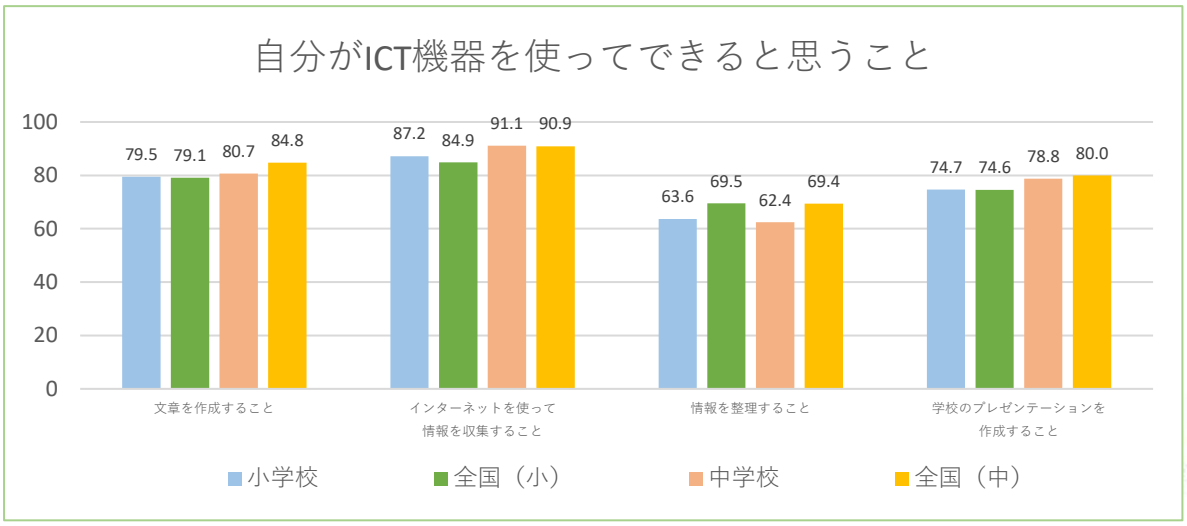
	小田原市	全国
小学校	**82.4%**	85.7%
中学校	**86.0%**	87.0%

主体的・対話的で深い学びの実現に向け、各学校で授業研究などの取組が行われているが、児童生徒自身も、学習活動の中で行う対話の良さを実感していると考えられる。**他の児童生徒の様々な思いや考えと出会うことによって、自分の考えが変わったり、新たなものに気付いたりといった経験をさらに積み重ねられるようにしていくことが望まれる。**そのためにも、温かく互いを認め合う学習集団の形成が不可欠である。



（２）教育環境に関わる項目について

【項目１】「あなたは自分が PC・タブレットなどの ICT 機器でできることについて次のことにどれくらいあてはまりますか」

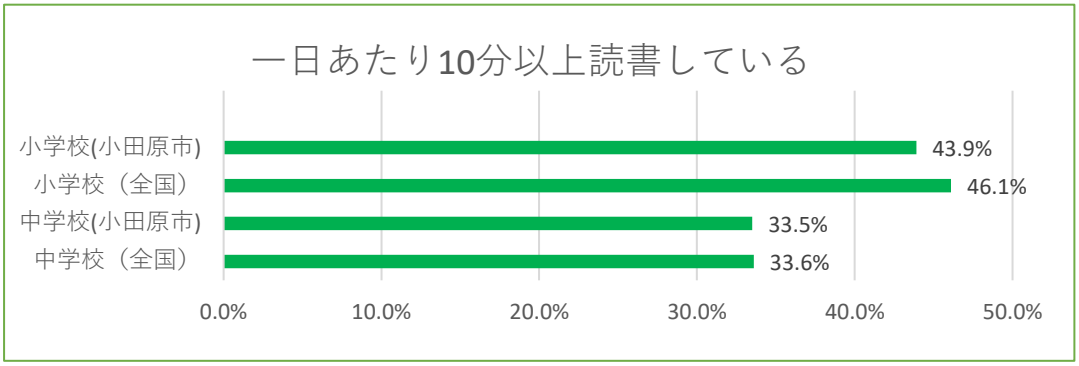




ICT 機器を活用できると考えている児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向があることが文部科学省の今年度のクロス集計で分かっている。また、**ICT 機器活用に自信がある児童生徒ほど、探究的な学びに取り組んだと回答している傾向**もあり、**ICT の活用が探究的な学習において有効であること**が分かる。同じく **ICT 機器活用に自信がある児童生徒ほど各教科における学びの充実や自分にはよいところがあると回答している傾向**がある。課題の解決に取り組む学習活動や発表・表現する活動の中で、その目的に応じて検索や情報の選択場面を作り、力をつけていくとよい。

【項目２】「１日当たりどのくらいの時間、読書をするか」

※「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1 日当たりどのくらいの時間、読書をしますか（電子書籍も読書に含む。教科書や参考書、漫画や雑誌を除く）」という質問事項に対し、10 分以上と回答した児童生徒の割合





昨年度と比べて全国的にも本市としても割合は少なくなっている。日常的に本に親しむことは、様々な世界や考え方に触れることにつながる。さらに国語の調査結果から課題として見えた国語の書く力や読む力などをはじめ、他教科も含めた学力の向上にもつながる。電子書籍も含め、**児童生徒が進んで本に親しめるよう、様々な読書環境を整えたり、声かけをしたりして工夫していくことが引き続き重要**である。